

知的障害児・者の生活の質(QOL)に及ぼす スポーツ・レクリエーション活動の影響

南條 正人 仲野 隆士 富田 恵子

キーワード：知的障害児・者、生活の質 (QOL)、スポーツ・レクリエーション活動

A study of the influence of recreational sport activities on the quality of life of people with mental retardation

Masato Nanjoh Takashi Nakano Keiko Tomita

Abstract

The purpose of this study was to clarify the relations between recreational sport activities and the quality of life (QOL) of people with mental retardation by using "the questionnaire of the quality of life (QOL) for advanced age people with mental retardation", which was developed by Suemitsu and others as the Japanese version by adopting Schalock and others'.

One hundred and seventy one subjects were selected by personnel from several institutions for the mentally retarded in Miyagi prefecture, in which 153 subjects were used by judging their ability to understand questions, and also 110 guardians were included.

The results of the study were summarized as follows: (1) practical habits of recreational sport activities of people with mental retardation had positive influence on their QOL; (2) there was no sex difference in their QOL; and a form of habitation affected their QOL.

Key words : people with mental retardation, quality of life, recreational sport activity

1. 研究の目的及び先行研究の検討

1. 研究の目的

2000年の「知的障害児(者)基礎調査」によると、知的障害児・者の総数は45万9000人にもものぼる。また、知的障害者をはじめ発達障害がある人たちの生命予後は、国民の平均寿命に比べれば短い、時代とともに延びている。特にダウン症の平均寿命に関しては、今日では50歳ないし60歳代を迎える人も珍しくない(正木, 1999)。しかし、有馬(1999)によれば、E県の養護学

校5校における肥満児の割合は20%を超え、その割合が5%程度である健常児と比べ、非常に高い比率であるという。したがって、一般的に卒業後の身体活動の機会が少なくなりがちな知的障害児・者にとり、運動習慣を在学中に確立することは健常児よりもはるかに重要であるといえる。それと同時に、地域におけるスポーツやレクリエーション活動を行う場、並びに彼らを支援する組織や団体が必要不可欠であると思われる。

Landesman(1986)は、研究者たちに適応行動のレベ

ルにこだわることを超え、生活の質 (QOL) の概念を確立し、その測定法を研究し、高いレベルの生活の質 (QOL) をもたらす因子を抽出すべきであると述べた。また、Schalock (1989) らは、生活の質 (QOL) が 1990 年代の重要な課題であろうと指摘した。そのことによって、知的障害をはじめとする発達障害福祉の分野では、1990 年代に入ってから多くの研究者が関心を寄せ、研究がなされてきた (Biglow, Gareau & Young, 1991・Brown & Bayer, 1992・Rosen, Simon & McKinsey, 1995・Schalock & Keith, 1993)。その中でも Schalock (1993) らの業績は、知的障害をはじめとする発達障害福祉の生活の質 (QOL) を測定する方法をいくつか開発しているということと、1997 年から 1998 年の米国精神遅滞学会 (AAMR) President に推挙されたという点から注目に値するものであると末光 (1999) らは述べている。そこで本研究は、Schalock (1993) らが作成したものを末光 (2000) らが日本版に開発した「高齢知的障害者用生活の質 (QOL) の質問紙」を用い、スポーツ・レクリエーション活動と知的障害児・者の生活の質 (QOL) との関連を分析する。そして、その関連を明らかにした上で、知的障害児・者の生活の質 (QOL) を向上するためには、スポーツ・レクリエーション活動がどうあるべきなのかを考える上での基礎資料を得ることを本研究の主たる目的とする。

2. 先行研究の検討

アメリカを中心に、諸外国では 1980 年代以降、知的障害児・者の生活の質 (QOL) の研究が始まり、1990 年代に入ってから多くの研究者により関連する研究が盛んになっていった。

多くの研究者の論議的的は、測定の方法であった。Schalock (1990) は、生活の質 (QOL) の理解はまだ始まったばかりなので、これからも生活の質 (QOL) 測定への努力をしていかなければならないと指摘している。これまでの研究の中での生活の質 (QOL) の測定方法としては、主観的測定と客観的測定の方向がある。主観的測定としては、Heal & Chadsey-Rusch (1985) の「ライフスタイル満足度尺度 (the Lifestyle Satisfaction Scale)」, Schalock, Keith & Hoffman (1990) の「生活の質に関する質問紙 (the Quality of Life Questionnaire)」, Cummins (1993) の「地域における生活の質知的障害版 (the ComQoL-ID)」, Schalock & Keith (1993) の「生活の質・質問紙」などの尺度が開発されてきている。

一方、日本においては、医療のある分野や高齢者福祉では生活の質 (QOL) の測定の試みがなされているが、知的障害児・者に関しては、大きな関心が向けられているものの、定量的に測定するという試みはあまりされて

いない。日本における研究では、河東田らの (1999) 「知的障害者の生活の質に関する日瑞比較研究」において、会話によるコミュニケーションがある程度可能な知的障害がある人たちを対象とした生活の質 (QOL) の調査を行った。その結果、入所施設のような本人の意思や主体性が生かしくい生活形態では、生活の質 (QOL) の評価が著しく低いという実態を明らかにした。末光ら (2000) の「高齢知的障害者の日本版 QOL 質問紙簡易版に関する研究」においては、Schalock & Keith (1993) に開発した「生活の質・質問紙」を用いて、入所施設利用者の生活の質 (QOL) を調査した。その結果、入所施設利用者の本人回答と通所者、入所施設利用者の本人回答と職員回答の比較を行った。入所施設利用者の本人回答と職員回答の比較において、5%水準で有意差が認められたと報告している。角田と池田 (2002) の「知的障害者のライフスタイル満足度に関する研究—居住形態からの検討—」では、Harner and Heal (1993) が開発した「Lifestyle Satisfaction Scale」を用いて、入所施設、グループホーム、家族と同居という居住形態の異なる知的障害者のライフスタイル満足度を明らかにする研究を行った。その結果、グループホーム居住者の満足度が、入所施設居住者および家族同居者と比較して有意に高かったと報告している。

障害者の余暇活動についての研究では、これまでのレクリエーション活動の経験が少ないため、選択の可能性が限られているとされている。また、Firth と Rapley (1990) は、障害者が参加する活動は一人でやる活動が多いことを発見し、障害者の活動を制限しているのは能力ではなく、機会の欠如だと指摘している。また、富安 (1990) は、地域の中でのレクリエーション活動に関して、一般的にレクリエーション活動には障害がある人々だけが集められていると指摘している。

そこで、本研究は、スポーツ・レクリエーション活動に着目し、知的障害児・者の生活の質 (QOL) を明らかにすることにした。本研究は、主観的測定かつ定量的に測定されていない知的障害児・者の生活の質 (QOL) を測定することと、生活の質 (QOL) に関わるスポーツ・レクリエーション活動に着目したというところにオリジナリティーがあり、この研究領域の発展に寄与すると考えている。

3. 仮説の設定

本研究では、以下の①～③の仮説を立て、知的障害児・者のスポーツ・レクリエーション活動の実施が、知的障害児・者の生活の質 (QOL) に関連しているかを調査し、仮説の検証を試みることにした。仮説の根拠として、①の仮説は、医療や高齢者福祉の領域では、これまで生活の質 (QOL) の測定の試みが多くなされ、スポーツ・レ

クリエーション活動が生活の質 (QOL) 向上に極めて重要であることが、多くの研究者によって明らかにされてきた。そこで、知的障害児・者においても同じ様なことがいえるのではないかと考え、仮説の検証を試みることにした。また、②と③の仮説については、先行研究で検証されており、本研究においても検証を試みることにした。

- ①知的障害児・者のスポーツ・レクリエーション活動実践は生活の質 (QOL) にポジティブな影響を及ぼす。
- ②知的障害児・者における生活の質 (QOL) は、性差による違いは無い。
- ③知的障害児・者の居住形態 (在宅・施設入所・グループホーム) は生活の質 (QOL) に影響を及ぼす。

II. 研究方法

1. 調査対象の抽出・調査方法

本研究のサンプルを得るため、宮城県仙南地区における在宅知的障害者、知的障害者入所施設、知的障害者通所施設、グループホーム利用者及び養護学校高等部の中で、協力が得られる施設及び学校を抽出した。そこで、知的障害児・者を対象に、実際に生活の質 (QOL) を測定する際に問題となるのは、言語理解及び表出言語である。本研究は、先行研究を参考に、会話によるコミュニケーションが可能、質問の内容に対して適切な言語理解及び表現ができる療育手帳 B の軽度知的障害児・者をサンプルとし、施設職員並びに学校職員により抽出された者とその保護者を調査対象とした。

施設職員、学校職員に抽出された 171 名のうち、質問に対して適切な言語理解ができていると判断された 153 名と保護者 110 名を本研究の対象とした。対象者の回収率は 89.5% (153 件) で、保護者の回収率は 64.3% (110 件) である。

調査方法は、対面の個人面接法を採用し、保護者は郵送法を採用した。調査期間は平成 15 年 7 月より開始し、9 月に終了した。施設職員及び学校職員により抽出された対象者には、本研究の主旨や面接内容の説明を行い、承諾を得た対象者と面接日時を決定した。なお面接時には、守秘義務の説明を行った後に面接を開始した。面接時間は 1 人あたり 30 分から 40 分であった。

個人面接法においては面接者と対象者間のラポール形成が重要であると言われている。そこで、面接者である筆者は、対象者が普段の生活の中で多くの時間を費やしている施設または学校に向き、その形成に努めた。そうすることによって、対象者が緊張せずに話すことのできる環境づくりに配慮した。

III. 結果及び考察

1. サンプルのプロフィール

サンプルのプロフィールは、次のようである。性別では、女性よりも男性が多く 62.1% を占め、年齢別にみると「10 歳代」、「20 歳代」を中心とした分布にある。これは、養護学校のサンプルが多かったためである。家族数では、「4 人」、「5 人」、「5 人以上」を中心とした分布で、兄弟数では、「2 人」が 33.3% で最も多く、次いで「3 人」が 29.4% となっており、2 人～3 人が 6 割以上となっている。友人数では、半数以上の者が「5 人以上」となっている。また、「0 人」の者は 1 割程度みられるが、スポーツ・レクリエーション活動を積極的に実施することによって、友人を増やすことは可能であるかもしれない。居住形態は、「1 戸建て」と答えた者が 39.9% と最も多く、居住同居では「家族同居」が 61.4% となっている。就寝部屋では、「個室」が 38.6% と最も多く、「4 人以上部屋」は 0% となっている。就労形態では、「学生」が 66.7%、次いで「福祉就労」(31.4%)、「一般就労」(1.9%) の順となっており、知的障害者に対して、一般就労の門があまり開かれていないといえる。労働時間は「6 時間～7 時間」が 70.5% で最も多くなっている。自由なお金は「使う際に家族から」が 54.9% で最も多い。これは、知的障害児・者がお金の管理が困難である可能性が高いといえる。次いで金額は「5000 円未満」が多く 23.5% となっている。1 人でも可能な移動手段では、「電車」、「バス」、「自転車」が中心とした分布である。「自動車」や「バイク」も若干の者が可能である。会話では、「好き」と回答した者が 79.1% を占め、集団行動でも「好き」と回答した者が 76.5% を占めている。

自己の健康状態や体力等に対する評価は、健康状態において「健康」または「普通」と回答した者が 9 割を超えていることから、自己の健康状態に対する自信が窺える。体力では「不安」と回答した者が 2 割を占めている。食事や睡眠では、9 割以上が「とれている」または「普通」と答えている。

2. 活動群と非活動群の比較

1) BMI 数値

定期的に月 1 回以上スポーツ・レクリエーション活動を行っている者を活動群と定義し、その他を非活動群と定義した。

BMI 数値とは、身長と体重から客観的に肥満度を測定するものである。本研究では、「日本肥満学会肥満症診断基準委員会」(2000) が示している判定数値を用いた。その判定数値は、18.5 未満が低体重 (やせ)、18.5 以上 25 未満が普通体重 (正常)、25 以上が肥満とされている。

活動群と非活動群の BMI 数値を比較してみると (表 1)、若干ではあるが肥満者の割合に差がみられる。これ

は、何かのスポーツ・レクリエーション活動を行うことが身体的にプラスの影響を及ぼすことを示したものとされる。また、体重が普通の領域にある群では12%以上も差があるが、これも同様に考えることができよう。

表1. 活動群と非活動群のBMI数値の比較

	低体重	普通	肥満	計
活動群	11 19.3	37 64.9	9 15.8	57 100.0%
非活動群	13 29.5	23 52.3	8 18.2	44 100.0%

$X^2=1.85$ $df=2$ $n.s.$

2) 定期的を実施する活動種目

本研究の対象者が定期的を実施する活動種目を『レジャー白書(2003)』を参考にして、スポーツ部門、趣味・創作部門、娯楽部門、観光・行楽部門の4部門に分類してみた。スポーツ部門14種目(51.9%)、趣味・創作部門7種目(25.9%)、娯楽部門3種目(11.1%)、観光・行楽部門3種目(11.1%)の計27種目である。そこでは、定期的に活動を行っている人の半数が、何かしらのスポーツを行っていることがわかる。また、『レジャー白書(2003)』における平成14年の余暇活動の参加人口上位20種目を同様に4部門に分類してみると、スポーツ部門3種目(15%)、趣味・創作部門6種目(30%)、娯楽部門(30%)、観光・行楽部門5種目(25%)の計14種目である。これと比較した場合、知的障害児・者の余暇活動は娯楽部門や観光・行楽部門において、金銭に関わる分野での参加が少ないという傾向にあるといえる。

3) 月単位の定期活動の実施頻度

スポーツ・レクリエーション活動を定期的に行っている活動群の実施頻度をみると、月に10回以上実施が47.5%、月に7回~9回実施が22%であり、全体の約70%を占めた。

4) 活動満足度

活動群と非活動群における活動満足度をみると(表2)、活動群では「満足」と回答した人は全体の42.6%に対し、非活動群では全体の8.5%と大きな差があった。一方、「不満」と回答した活動群は、わずか3.7%に対し、非活動群では2割近くが不満と感じていることがわかった。このことから、スポーツ・レクリエーション活動を定期的に行っている人の方が満足していることがうかがえる。そこで、カイ二乗検定を実施した結果、0.1%水準で有意差が認められ、統計的にも有意な差があることが明らかとなった。

表2. 活動群と非活動群の活動満足度の比較

	満足	普通	不満	計
活動群	35 42.6	44 53.7	3 3.7	82 100.0%
非活動群	6 8.5	52 73.2	13 18.3	71 100.0%

$X^2=25.95$ $df=2$ $p<.001$

5) 一緒に活動する人

活動群と非活動群において、それぞれ一緒に活動する人を比較してみると、活動群、非活動群とも全体の40%程度で一番多くの割合を占めていたのは、「友人」だった。また、「その他」と回答した多くは「一人」ということで、両群とも一人で活動している割合が多いことがわかった。このことは、スポーツ・レクリエーション活動を行う機会及び支援する組織が欠如しているということの意味していると考えられる。なお、統計的な有意差は認められなかった。

6) 活動する際の友人の存在

「活動を行う際に友人がいるか」という質問項目では、「いる」と回答したのは、活動群で全体の72%であった。これに対し、非活動群では、全体の50%程度で、「いない」と回答した人とほぼ同じ割合であった。これは、スポーツ・レクリエーション活動が集団活動の要素が多く含まれていることが影響していると考えられる。そこで、カイ二乗検定の結果、5%水準で有意差が認められた。

表3. 活動を共にする友人の比較(活動群・非活動群)

	いる	いない	計
活動群	59 72.0	23 28.0	82 100.0%
非活動群	37 52.1	34 47.9	71 100.0%

$X^2=4.96$ $df=1$ $p<.05$

7) 活動群と非活動群における生活の質(QOL)との関連

生活満足度要因として設定した13の質問項目により、活動群と非活動群を比較してみた(表4-1)。その結果、活動群が非活動群に比べ、すべての質問において高い数値を示した。13の質問のうち9項目で統計的に有意な差が認められた。また、生活満足度全体の平均でも有意差($p<0.01$)が認められた。この結果は、スポーツ・レクリエーション活動が日常生活に良い影響を与えるということを反映している。

「日常生活でどれくらい、楽しみや娯楽がありますか」の質問では、活動群が非活動群に比べて高い数値で有意差($p<0.01$)が認められた。また、「年を重ねることにより、楽しみや娯楽が増えると思いますか」の質問でも5%

水準で有意差が認められた。これは、活動群と非活動群の現状のスポーツ・レクリエーション活動から得られる「建設的な情緒」が影響している可能性があると考えられる。

8 項目の質問を用いた社会参加・活動による活動群と非活動群を比較してみた (表 4-2)。活動群が非活動群に比べ、すべての質問において高い数値を示し、8 項目の質問のうち 6 項目で有意差が認められた。また、社会参加・活動全体の平均でも有意差 ($p<0.01$) が認められた。

仕事や余暇時間に行う日中の活動に関する質問の「毎日の作業や活動はあなたにとって、意味がありますか」、「現在参加している日中の活動は気に入っていますか」、「日中活動から得られる技能や経験に満足していますか」の 3 項目の質問において、非活動群に比べ活動群が高い

数値を示し、有意差 ($p<0.01$) が認められた。これは、スポーツ・レクリエーション活動を含む日中の活動を行っている活動群が生活の質 (QOL) 向上に大きく寄与しているといつて良いだろう。

「地域の友人との行き来はよくありますか」と「地域へ買物・遊び・趣味等で外出することはありますか」の質問でも、非活動群に比べ活動群が高い数値を示し、有意差 ($p<0.01$) が認められた。これは、非活動群は外出の機会が欠如していることが理解できる。

9 項目の質問を用いた自立・自由度による活動群と非活動群を比較してみた (表 4-3)。活動群と非活動群を比べ、9 項目の質問のうち 6 項目の質問で有意差 ($p<0.01$) が認められた。特に、「衣服・装飾品・化粧品・持ち物での制約はありますか」と「嗜好品 (たばこ・お酒・コーヒー等) を適宜に楽しめますか」の質問における差は、自

表 4-1. 活動群と非活動群にみる t 検定

生活の質(生活満足度)	上段 平均値		下段 標準偏差	t検定 (男女混合)
	活動群 n=82	非活動群 n=71		
全体として、現在のあなたの生活には。	2.27	2.03		*
日常生活でどれぐらい、楽しみや娯楽がありますか。	2.24	1.77		**
年を重ねることにより、楽しみや娯楽が増えると思えますか。	2.30	2.01		*
昔よりも身体の健康に不安がありますか。	2.18	2.10		
昔よりも住環境で不自由を感じることがありますか。	2.51	2.23		*
他の人に比べて抱えている問題は多いですか。	2.17	1.99		
1ヶ月に何回ぐらい孤独を感じますか。	2.38	2.04		**
回りの人は年を重ねることでより大切にしてくれますか。	2.55	2.27		*
他人と比べて、よい暮らしをしていると思えますか。	2.46	2.04		**
あなたと家族の間はうまくいっていると思えますか。	2.52	2.17		**
今後、家族との関係は変化すると思えますか。	2.18	2.01		
昔よりも生活上の心配はどうですか。	2.10	2.01		
悩みや困った時、相談出来る人が身近にいますか。	2.18	1.90		*
生活	2.31	2.04		**

** $p<0.01$ * $p<0.05$

表 4-2. 活動群と非活動群にみる t 検定

生活の質(社会参加・活動)	上段 平均値		下段 標準偏差	t検定 (男女混合)
	活動群 n=82	非活動群 n=71		
年をとるに従って、やりたいことが出来るようになると思えますか。	2.45	2.11		*
毎日の作業や活動はあなたにとって、意味があると思えますか。	2.42	2.08		**
現在参加している日中の活動は気に入っていますか。	2.61	2.10		**
日中活動から得られる技能や経験に満足していますか。	2.30	1.96		**
現在参加している日中活動は誰が決めていますか。	2.44	2.18		
昔よりも地域へ出かけることに制限を受けることがありますか。	2.37	2.25		
地域の友人との行き来はよくありますか。	1.86	1.55		**
地域へ買物・遊び・趣味等で外出することはありますか。	2.41	2.06		**
社会	2.36	2.04		**

** $p<0.01$ * $p<0.05$

表 4-3. 活動群と非活動群にみる t 検定

生活の質(自立・自由度)	上段 平均値		下段 標準偏差	t検定 (男女混合)
	活動群 n=82	非活動群 n=71		
買物の時、お金の使い方は誰が決めていますか。	2.65	2.39		
起床・就寝・食事など日常的なことについて、どの程度の決定権がありますか。	2.25	2.28		
衣服・装飾品・化粧品・持ち物での制約はありますか。	2.82	2.10		**
嗜好品 (たばこ・お酒・コーヒー等) を適宜に楽しめますか。	2.30	1.69		**
あなたは保護者ないし後見人を信頼していますか。	2.69	2.24		**
家族との連絡(外泊・面会・手紙・電話)で制約を受けることがありますか。	2.63	2.20		**
あなたに危害、迷惑、怒りを及ぼすような人と一緒に暮らしていませんか。	2.63	2.49		
これからの生活について自分の意見を聞いてもらっていますか。	2.38	1.94		**
総じてあなたの生活は。	2.72	2.11		**
自立	2.56	2.16		**

** $p<0.01$ * $p<0.05$

己決定・自己選択ができる環境及び能力が要因の1つとして考えられる。

自立・自由度全体の平均においても、非活動群に比べ活動群が高い数値を示し、有意差 (p<0.01) が認められた。

以上のことから、活動群と非活動群の違いをみると活動群が全体的に高い数値を示し、30項目の質問のうち21項目の質問で有意差が認められた。このように、知的障害児・者のスポーツ・レクリエーション活動が生活満足度、社会参加・活動及び自立・自由度で影響を与えており、知的障害児・者の生活の質 (QOL) 向上に寄与しているといえよう。

8) 性別による活動群と非活動群の生活の質 (QOL) との関連

性別の違いによる活動群と非活動群の生活の質

(QOL) との関連をみた。生活満足度 (表 5-1) 全体の平均では、男女とも非活動群に比べ活動群で高い数値を示し、有意差 (p<0.01) が認められた。

「日常生活でどれぐらい、楽しみや娯楽がありますか」では、男女とも活動群が高い数値を示しており、性別でも知的障害児・者のスポーツ・レクリエーション活動の実施が生活に満足を与え、生活の質 (QOL) に寄与しているといえる。また、「あなたと家族の間はうまくいっていると思いますか」においても、男女とも活動群が非活動群よりも高い数値を示し、有意差 (p<0.05) が認められた。

女性の活動群と非活動群では、「回りの人は年を重ねることで、より大切にしてくれますか」と「他人と比べて、よい暮らしをしていると思いますか」の2項目において、数値的な差が認められた。

性別の違いにみる生活の質 (QOL) の社会参加・活動

表 5-1. 活動群と非活動群における性別にみる t 検定

生活の質(生活満足度)	活動群		非活動群		t検定	
	上段 平均値		下段 標準偏差		男	女
	男(n=62)	女(n=20)	男(n=33)	女(n=38)		
全体として、現在のあなたの生活には。	2.27	2.25	2.03	2.03		
日常生活でどれぐらい、楽しみや娯楽がありますか。	2.27	2.25	1.85	1.71	*	**
年を重ねることにより、楽しみや娯楽が増えると思いますか。	2.31	2.40	2.00	2.03	*	
昔よりも身体の健康に不安がありますか。	2.24	2.10	2.12	2.08		
昔よりも住環境で不自由を感じるがありますか。	2.50	2.65	2.21	2.24		
他の人に比べて抱えている問題は多いですか。	2.21	2.25	2.21	1.79		
1ヶ月に何回ぐらい孤独を感じますか。	2.35	2.25	2.24	1.87		
回りの人は年を重ねることでより大切にしてくれますか。	2.48	2.65	2.21	2.32		**
他人と比べて、よい暮らしをしていると思いますか。	2.37	2.60	2.12	1.97		**
あなたと家族の間はうまくいっていると思いますか。	2.47	2.60	2.06	2.26	*	*
今後、家族との関係は悪化すると思いますか。	2.23	2.10	1.97	2.05		
昔よりも生活上の心配はどうですか。	2.10	2.35	1.97	2.05		
悩みや困った時、相談出来る人が身近にいますか。	2.21	2.20	1.94	1.87		*
生活	2.31	2.36	2.07	2.02	**	**

**p<0.01 *p<0.05

表 5-2. 活動群と非活動群における性別にみる t 検定

生活の質(社会参加・活動)	活動群		非活動群		t検定	
	上段 平均値		下段 標準偏差		男	女
	男(n=62)	女(n=20)	男(n=33)	女(n=38)		
年をとるに従って、やりたいことが出来るようになりますか。	2.45	2.45	2.18	2.05		
毎日の作業や活動はあなたにとって、意味があると思いますか。	2.52	2.25	2.09	2.08	**	
現在参加している日中の活動は気に入っていますか。	2.53	2.75	1.91	2.26	**	**
日中活動から得られる技能や経験に満足していますか。	2.29	2.35	1.85	2.05	*	
現在参加している日中活動は誰が決めていますか。	2.31	2.60	2.03	2.32		
昔よりも地域へ出かけることに制限を受けることがありますか。	2.32	2.40	2.24	2.26		
地域の友人との行き来はよくありますか。	1.89	1.65	1.61	1.50	*	
地域へ買物・遊び・趣味等で外出することはありますか。	2.42	2.40	2.21	1.92		**
社会	2.34	2.36	2.02	2.06	**	**

**p<0.01 *p<0.05

表 5-3. 活動群と非活動群における性別にみる t 検定

生活の質(自立・自由度)	活動群		非活動群		t検定	
	上段 平均値		下段 標準偏差		男	女
	男(n=62)	女(n=20)	男(n=33)	女(n=38)		
買物の時、お金の使い方は誰が決めていますか。	2.73	2.45	2.36	2.42		
起床・就寝・食事など日常的なことについて、どの程度の決定権がありますか。	2.23	2.15	2.18	2.37		
衣服・装飾品・化粧・持ち物での制約はありますか。	2.74	2.75	2.24	1.97	**	**
嗜好品 (たばこ・お酒・コーヒー等) を適宜に楽しめますか。	2.18	2.30	1.91	1.50	*	**
あなたは保護者ないし後見人を信頼していますか。	2.58	2.85	2.09	2.37	**	*
家族との連絡(外泊・面会・手紙・電話)で制約を受けることがありますか。	2.56	2.80	2.06	2.32	**	**
あなたに危害、迷惑、怒りを及ぼすような人と一緒に暮らしていませんか。	2.61	2.75	2.45	2.53		
これからの生活について自分の意見を聞いてもらっていますか。	2.37	2.40	1.91	1.97	**	
総じてあなたの生活は。	2.73	2.55	2.15	2.08	**	
自立	2.53	2.56	2.15	2.17	**	**

**p<0.01 *p<0.05

との関連をみた (表 5-2)。男女とも「現在参加している日中の活動は気に入っていますか」の質問で有意差 ($p<0.01$) が認められた。特に男性の非活動群に比べ活動群においては、日中活動に関する質問で有意差が認められ、スポーツ・レクリエーション活動を含む日中活動の満足感・充実感が良い影響を与えているといえる。

生活の質 (QOL) の社会参加・活動全体の平均でも、男女とも非活動群に比べ活動群が高い数値を示し、有意差 ($p<0.01$) が認められた。

性別の違いにみる生活の質 (QOL) の自立・自由度との関連をみた (表 5-3)。男女とも有意差が認められた質問は、「衣服・装飾品・化粧・持ち物での制約はありますか」、「嗜好品 (たばこ・お酒・コーヒー等) を適宜に楽しめますか」、「あなたは保護者ないし後見人を信頼していますか」、「家族との連絡 (外泊・面会・手紙・電話) で制約を受けることがありますか」の 4 項目であった。これも、自己選択・自己決定ができる環境・能力が影響していると考えられる。

男性の非活動群に比べ活動群では、「これからの生活について自分の意見を聞いてもらっていますか」と「総じてあなたの生活は」の 2 項目で有意差 ($p<0.01$) が認められた。

生活の質 (QOL) の自立・自由度全体の平均でも、男女とも非活動群よりも活動群が高い数値で有意差 ($p<0.01$) が認められた。

以上の結果から、性別による活動群と非活動群の生活の質 (QOL) において、男女とも活動群が非活動群よりも高い数値を示すことがわかった。つまり、知的障害児・者のスポーツ・レクリエーション活動の実施が生活の質 (QOL) に良い影響を与えるといえるのである。

3. 性別にみる生活の質 (QOL) との関連

性差に着目し、生活の質 (QOL) の比較を試みた。30 項目の質問のうち 7 項目で有意差が認められたものの、半数以上の質問では有意差が認められなかった。また、生活満足度、社会参加・活動、自立・自由度の各項目においても有意差が認められなかった。この点については、角田と池田 (2002) による「知的障害者のライフスタイル満足度調査—居住形態からの検討—」においても、性差は認められないという報告があり、今回の調査でも同様の結果が得られたといえる。

以上のことから、知的障害児・者における生活の質 (QOL) は、「性差による違いは無い」ということがわかった。

4. 居住形態における生活の質 (QOL) との関連

在宅、施設入所、グループホームという居住形態の異なる知的障害児・者の生活満足度、社会参加・活動、自立・

自由度の 3 項目から比較を行った。

生活の質 (QOL) 合計得点及び各項目の平均は、グループホーム居住者が最も高く、在宅居住者、施設入所者と続いた。これは、角田と池田 (2002) の調査と同様な結果である。

居住形態の影響を明らかにするため、各質問項目ごとに t 検定を行った。その結果、在宅と施設入所の間では、30 項目の質問のうち 16 項目で 1% 水準、2 項目で 5% 水準で有意差が認められた。在宅とグループホームでは、24 項目で 1% 水準、1 項目で 5% 水準で有意差が認められた。施設入所とグループホームでは、26 項目で 1% 水準、2 項目で 5% 水準で有意差が認められた。

以上のことから、「居住形態も生活の質 (QOL) に影響を与える」といえる。

IV. 結論

医療の分野や高齢者福祉において、これまで「生活の質 (QOL)」の測定の試みが多くなされている。また、スポーツ・レクリエーション活動が「生活の質 (QOL)」向上に極めて重要であることは、多くの人が認めることである。また、平成 9 年度版『障害者白書』は「生活の質的向上をめざして」をテーマとしている。その第 1 部は「障害のある人の生活を豊かにするスポーツ・レクリエーション—生活の質的向上をめざして—」であり、スポーツ・レクリエーション活動による豊かさを 1 つの「生活の質 (QOL)」とするあり方を示している。

本研究では、それらのことを踏まえ、知的障害児・者のスポーツ・レクリエーション活動と「生活の質 (QOL)」の関連を明らかにし、現状並びに今後の課題などを明らかにすることを目的とした。その研究結果は以下のよう

- ①活動群と非活動群の BMI 数値は若干の差はあるものの、有意差は認められなかった。
- ②活動群における定期的実施する活動種目を部門別に分類した結果、最も多いのがスポーツ部門 (51.9%) であった。次いで、趣味・創作部門 (25.9%)、娯楽部門 (11.1%) と観光・行楽部門 (11.1%) の順であった。
- ③活動群における月単位の定期活動の実施頻度は、10 回以上実施している者が 50% 程度存在する。
- ④活動群と非活動群の活動満足度は、非活動群よりも活動群が高く、0.1% 水準で有意差が認められた。
- ⑤活動群と非活動群の一緒に活動する人は、活動群、非活動群とも「友人」が最も多く、有意差は認められなかった。
- ⑥活動群と非活動群の活動する際の友人の存在は、非活動群よりも活動群で多く、5% 水準で有意差が認められた。
- ⑦性別による活動群と非活動群の生活の質 (QOL) にお

いて、男女とも活動群が非活動群よりも高い数値が示され、統計的にも有意差が認められた。

次に、本研究で設定した仮説の検証をする。本研究の対象者である知的障害児・者において、スポーツ・レクリエーション活動は、活動群の「生活の質 (QOL)」に良い影響をもたらしていることが明らかになった。したがって、「知的障害児・者のスポーツ・レクリエーション活動実践は生活の質 (QOL) にポジティブな影響を及ぼす」という仮説①は支持された。次に、性別に着目して検定を行った結果、有意差が認められなかった。このことから、「知的障害児・者における生活の質 (QOL) は、性差による違いは無い」という仮説②も支持された。さらに、居住形態における比較では、グループホーム居住者、在宅居住者、施設入所者という順に高い数値が示され、有意差が認められた。このことから、「居住形態は生活の質 (QOL) に影響を及ぼす」という仮説③も支持された。このように、本研究で設定した3つの仮説全てが支持されたという結果が得られた。

以上のことから、知的障害児・者がスポーツ・レクリエーション活動を積極的に実施することは、「生活の質 (QOL)」の向上に総体的に寄与するといえる。また、障害者スポーツ・レクリエーション活動を支援する組織が、少ないという実態が明らかになり、今後の障害者スポーツ・レクリエーション活動を支援する組織の設立が必要である。

最後に、本研究の対象者を知的障害児・者としたことに伴い、言語理解及び表出言語が問題となった。今後は、知的障害児・者の「生活の質 (QOL)」を測定する際の信頼性をさらに高める測定方法を検討していきたい。そして、知的障害児・者のスポーツ・レクリエーション活動の重要性を明らかにするためのデータを蓄積していきたいと考えている。また、本研究は、質問紙調査における知的障害児・者の横断的分析であることから、今後は縦断的な研究計画による分析を進めていきたいと考えている。

引用・参考文献

引用文献：

- 1) 有馬正高監修「知的障害を持つ人達の健康障害の実態と対策に関する研究」日本知的障害福祉連盟 46-47, 1999
- 2) Firth, H. and Rapley, M. 「Issues for People with Learning Disabilities」 Acquaintance to Friendship
- 3) 河東田博, 中園康夫「知的障害者の生活の質に関する日瑞比較研究」海声社 75-87, 1999
- 4) Landesman, S 「Quality of Life and Personal Satisfaction : Definition and Measurement

- Issues」Mental Retardation, 24, 14-143, 1986
- 5) 正木基文「生命予後」保健の科学, 41, (3), 167-171, 1999
- 6) Robert L, Schalock, Kenneth D, Keith, Karen Hoffman, and Orv C, Karan 「Quality of Life : Its Measurement And Use」Mental Retardation 27, 1, 25-31, 1989
- 7) 末光茂, 笹野京子, 菊池達男「高齢知的障害者の日本版 QOL 質問紙簡易版に関する研究」岡山県老人保健強化推進特別事業報告書, 2000
- 8) 富安芳和「グループホームをめぐるサービスシステム」発達障害研究, 12 (2), 81-87, 1990
- 9) 角田恵子, 池田由紀江「知的障害者のライフスタイル満足度に関する研究 - 居住形態からの検討 -」発達障害研究, 24, 2, 2002

参考文献：

- 1) 赤塚俊治「知的障害者福祉論序説」中央法規, 2000
- 2) Bigeow, D.A., Gareau, M. J. and Young, D. J. 「Quality of Life Questionnaire. Interviewer Rating Version : (b) Respondent Self-report Version」Western Mental Health Research Center, Oregon 1991
- 3) Brown, R.I. And Bayer, M.B. 「Rehabilitation Questionnaire and Manual : A Personal Guide to the Individual's Quality of Life」 Captus University Publications Toronto 1992
- 4) 福祉士養成講座編集委員会「障害者福祉論」中央法規, 2003
- 5) Heal, L.W. and Chadsey-Rusch, J. 「The Lifestyle Satisfaction Scale (LSS)」Applied Research in Mental Retardation, 6, 475-490, 1985
- 6) 厚生労働省健康局「平成12年国民栄養調査結果の概要」厚生労働省健康局生活習慣病対策室, 2002
- 7) 余野豊, 花村春樹監修『障害者教育の人間学』中央法規, 115-116, 215-219, 2001
- 8) Robert A. Cummins 「The Comprehensive Quality of Life Scale-Intellectual Disability : An instrument under development」Australia and New Zealand Journal of Developmental Disabilities 17, 259-264
- 9) Robert L. Schlock, and Keith. 「Quality of Life Questionnaire」IDS Publishing Corporation, 1993
- 10) 清水貞夫, 中村尚子「障害者福祉の現状・課題・将来」培風館, 1-6, 2003